

区民と創る台東区の男女平等参画のための情報誌

はばたき21

通信

2019・3

No.37

女性と仕事 それぞれの生き方



(撮影:橘蓮二)
落語に女性ならではの演出を加えたい



母でもなく、妻でもなく、
私でいられる場所



仕事は私の生きる糧



助産師の役割を守っていきたい

特集 女性と仕事 それぞれの生き方 ～あなたにとって仕事とは何ですか～

- どうする? 家庭での性教育
- たいとうのキラッとさん紹介
- はばたき21情報コーナーおすすめ図書案内
- はばたき21メールマガジン

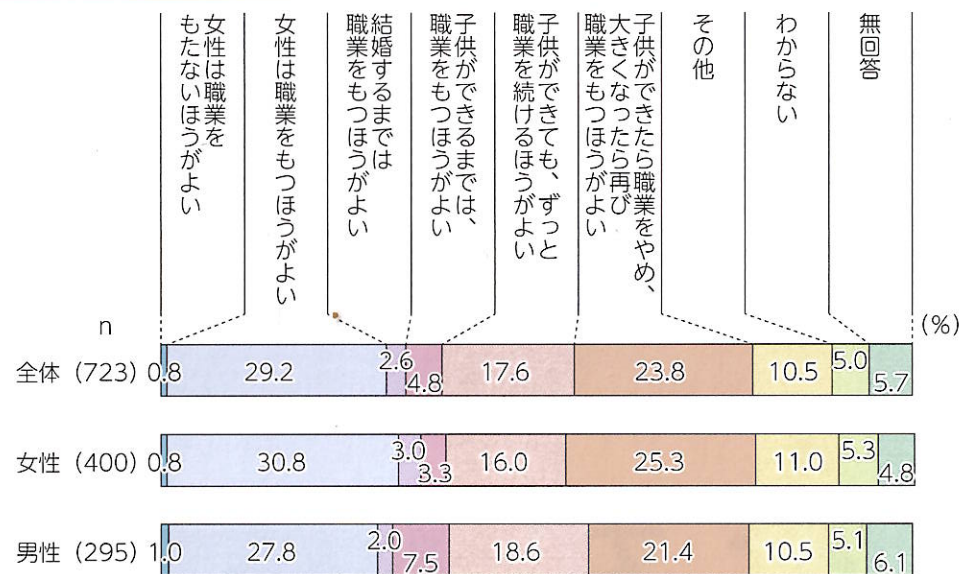
特集 女性と仕事 それぞれの生き方

あなたにとって仕事とは何ですか？

多様なライフスタイルに合わせて、働き方も人それぞれです。女性と職業について、みなさんはどう意識していますか。今回は、台東区で働く女性にインタビューをしました。

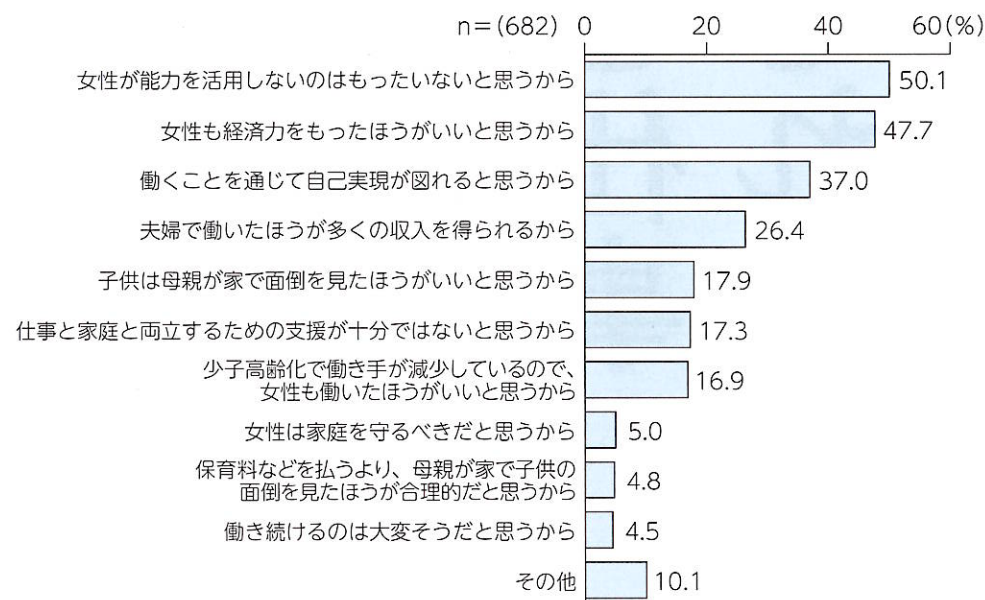
意識調査から

一般的に女性が職業をもつことについて、あなたはどのようにお考えですか。



「女性は職業をもつほうがよい」が約3割、次いで「子供ができたらか職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつほうがよい」が2割強。性別でみると、男性は女性よりも「子供ができるまでは、職業をもつほうがよい」で4.2ポイント高くなっています。

女性が職業をもつことについての意識に関し、そう考えた理由は何ですか。



【回収結果】
 発送数 1,800
 有効回収数 723 (有効回収率 40.2%)

【調査対象】
 平成30年4月1日現在、台東区にお住まいの満18歳以上の方

【調査方法】
 調査票の郵送配布及び郵送回収による

●調査概要
 台東区では、「台東区男女平等推進行動計画 はばたきプラン21」の改定に向けて、平成30年5月に「男女平等に関する台東区民意識調査」を実施しました。その中から一部を紹介しています。調査報告書は、「はばたき21」のほか、区政情報コーナー、区のホームページなどで閲覧できます。

落語に女性ならではの演出を加えたい

落語家 柳亭 こみち師匠

落語の道に入る

私は、早稲田大学卒業後、社会人生活を経て2003年2月、柳亭燕路に入門し、「生き方の舵を切るように」落語の道に入りました。入門当時、落語協会の女性落語家の先輩は6人（現在は5人）。落語界は男性社会であり、師匠・燕路に「落語は男がやるもの」と諭されましたが、熱意と覚悟は十二分にありました。

前座修業に男性と変わるものはありません。師匠の方や周囲に常に気をつけ、寝不足やプライベートのない生活が続くのはとても大変でしたが、ふりかえると「心の勉強の時間」でした。

2006年11月に二ツ目（前座の次の階級）に、2017年9月には真打に昇進しました。大師匠・小三治の「小」と師匠・燕路の「路」をあわせて「こみち」と付けていただいた名前は変わらずに昇進しました。

仕事と結婚・出産

真打になって高座への責任が増し、二ツ目時代とは一味も二味も違う緊張感で高座をつとめさせていただいております。

女性落語家が結婚し、子供を授かり、家庭生活を営むのはハードルが高いかもしれません。前座の数年间は自分の時間がないですし、真打になれば芸を磨き上げるために走りつづけなくてはなりません。女性が母親になると子育てに追われて、自分がそれまで大切にしていた江戸の香りや落語の登場人物らしさが私の高座で薄まってしまうのではないかと感じたことがあります。

ですから、できる限りブランクをあけたくないと思いました。二度の出産の際はお腹の大きいのを隠して出産数日前まで高座に上がり、3週間後には復帰しました。次の男の出産後は、産んだその日からベッドで落語の稽古を始めました。

私の台東区

二児の母として真打に昇進したのは私が落語史上初になりますが、落語家としてのキャリアを積んでいくなかで、結婚や出産を言い訳にしたくなかったのです。

台東区には浅草演芸ホールと鈴木本演芸場（上野）の二つの寄席があり、私も出演を多くいただいております。また、落語協会の事務所が上野にあり、稲荷町うららか亭で落語教室の講師をしています。夫は漫才師「宮田陽昇」の昇で、夫も浅草演芸ホールや東洋館に出演させていただいております。先日、家族で花やしきに行き、ふだん高座に上がっている台東区でプライベートも過ごすことができました。台東区は特別な街です。

落語のなかの男女

落語は男性の視線で語るものが



二児のママ落語家で初の真打に昇進した こみち師匠

多いのですが、なかには女性が活躍する（カギを握る）斬・テーマもあります。スタンダードな古典では、「たらちね」「お菊の皿」「お見立て」「転宅」「厩火事」「締め込み」「三枚起請」……。

江戸・明治が舞台でも男尊女卑とは限りませんが、男性落語家が男性の視線で語ると、女性は脇役・相手役、ときには男性を惑わせる存在として登場します。女性落語家がそのまま演じるのは不自然と受け取る人もいます。現代に生きる私が現代のお客様の心に訴えるには工夫が必要です。既存にはない「女性が息づいている場面」をこしらえることが、女性が古典落語を演じるポイントとなり得るかもしれません。「お見立て」や「三枚起請」に出てくる喜瀬川おいらんを単なる悪女ではなく人間らしさを加えて演じたり、「代書屋」「宿屋の富」「茶の湯」に従来の形になかった女性を登場させたりと、男性にはない視点をつくったりしています。

江戸・明治から語り継がれる落語に女性ならではの演出を加えることに、柳亭こみちとしての活路があるかもしれません。また、女性落語家がこれまで挑戦したことのない落語を手がけたいです。ママ落語家としてだけでなく、斬の前提もつくっていききたいのです。まだまだ先の話ですが、「寄席にいつも出ているおばあさん」が将来の目標です。

仕事は私の生きる糧

喫茶レストラン経営

大野 ひびみさん・美枝子さん・多香子さん

子育てをしながら 続けてきたお店

近所の会社で働くビジネスママが、お昼ご飯を食べに次々とお店にやって来ます。お客さんを席へ案内し、水を出し、注文を取り、できあがった料理をテーブルへ運ぶ。そんな昼時の慌ただしいホールを、あうんの呼吸で切り盛りするのは、大野一二三さん、娘の多香子さん、義娘の美枝子さん。キッチンでは、一二三さんの夫・勝弘さんと息子・貢一さんが鍋を振り、



50年近くもの長きの間、愛され続けている喫茶店「トロント」

次々と料理を作っていきます。「トロントは私が25歳の時に始めました。モーニングにランチ、ディナーをやって、息子と娘を育てながら仕事をするのは大変でした。子供たちには寂しい思いをさせてしまうこともあったと思います。でも、お店を休んだら生活していけなくなってしまうから。以来、ずっと続けていますよ」と一二三さん。

47年前にオープンし、勝弘さんと夫婦二人三脚でやってきた喫茶店トロント。息子の貢一さんと娘の多香子さんがお店を手伝うようになったのは、勝弘さんが病気で倒れてしまった時でした。「20年ほど前です。兄は他の飲食店で働いていて、私も勤めに出ていました。母も父の看病があり、お店をどうにかしないといけないということになり、兄と私は会社を辞めて、お店に入ることにしました。そのあと、お義姉ちゃんも手伝いに入ってくれるようになりました」と多香子さん。

おぎない、支え合いながら 家族みんな

その後、療養を経て、勝弘さんが仕事に復帰。美枝子さんと多香子さんが出産、子育てに負われる時期などはアルバイトの方に来てもらうこともあったそうですが、現在は、勝弘さん、一二三さん、貢一さん、美枝子さん、多香子さんの5人で日々、お客さんを迎えています。

家族で朝から晩まで顔を付き合わせていると、色々と苦労もありそうです。

「慌ただしい時や、疲れがたまってきたしまった時などに、キッチンでお義父さんと夫が衝突することがあるんです」と美枝子さん。

「それをお義姉ちゃんがなだめてくれるんです。私も、時々、家で両親とケンカをしてしまうんですが、お店には絶対に持ち込まないように気をつけています」と多香子さん。一二三さんはどのように感じているのでしょうか。

「うちではよく家族会議を開くんです。みんなで思っていることを話し合います。お恥かしいことですが『お店をもう閉めよう』なんて言い合いになったことも、何度かありましたよ。だけど、来てくださるお客さんがいるし、私たちにはここしかありませんから。イヤだって、やめられませんよ。」

いろいろあっても、我慢です」そう話す一二三さんに、やさしい眼差しを向ける美枝子さんと多香子さん。

「母も最近は体がつらそうだから、少しでも楽をさせてあげられたらと思っています。義姉も私も、3人の子育てをしており、フルには働けないのですが、新メニューを考えたり、自家製パンを販売したりして、新しいことを始めています」と多香子さん。

続けて、美枝子さんは「ここは、家族みんなでおぎない合って、支え合っているから、一人でも欠けるとまわらなくなっちゃうんですよ」と言います。

そして二人は目を合わせ「イヤでもやめられないよね」と微笑み、一二三さんは「仕事は、私にとっては生きがいですよ」と力強い言葉を残し、三人の看板娘は持ち場へと戻っていききました。



モーニング、ランチ、ディナーを3人交代で切り盛りする。一二三さん(中央)と義娘・美枝子さん(左)、娘の多香子さん(右)

母でもなく、妻でもなく、

私でいられる場所

パートタイマー

入江 麻由子さん

家事・育児という 仕事に専念

「もう聞いてくださいよ！ 今朝、長男が登校の直前に『制服のボタンがとれてる』って言うんです。しかも全部！ 毎日、こんなことばかりです(笑)」

開口一番、朝の慌ただしいエピソードが飛び出てきました。

「でも一人とも、小学校に上がって、少しずつ手が掛からなくなってきました。それまでは、来る日も来る日も24時間、二人の乳幼児と対峙し、長男が小学校、次男が幼稚園の時は二人の時間がバラバラ。まったく余裕がありませんでした」

1年前までの日々を振り返り、そう話す入江さんは、長男が生まれる前まで、保育士として働いていました。

「子供が好きなので、子供に関わる仕事がしたいと思い、保育士になりました。大学の附属病院で4年間病棟保育に就き、その後、訪

問型の病児保育現場で働いていました。仕事はずっと続けていきたくて、結婚、妊娠後も勤務していました。ただ悪阻がひどく、一旦、仕事を辞めました。職場は出産・育児へのサポート体制が厚く、入江さんは妊娠後に、現場から本部へ異動し、業務の軽減などしてくれたそうです。「続けようと思えば続けられたのかもしれない。ただ、長男の妊娠前に一度流産してしまったことがあり、夫とじっくり話をしました。当面は、私は体調管理をしながら家事を担当し、夫は外で働き生計を支えていく。夫婦のお互いの役割分担をそのように決めました」

地域での活動やPTAで 社会と関わっていく

長男に続き、次男が入江家に加わり、入江さんの仕事「家事・育児はドタバタを増しました。そんな中、入江さんは、幼稚園のPTAの役員を引き受け、また、

台東区の『ファミリー・サポート・センター』で、他の家庭のお子さんを預かることなどを始めました。「子供の成長と共に、生活のリズムが作れるようになってきたので、仕事をしたいなと思いはじめました。でも、子供のことがあるのでフルタイムでは働けません。ファミリーは自宅でできる仕事です。まだ、なかなか思うようにできていないのですが、近所に児童館や子ども家庭支援センターがないので、預け先に困っている家庭の役に立てればと思い始めました。PTAは、子供たちの成長に関わっていけたらと思います、お引き受けしました」

PTAでは、色々な会に出席し、様々な方と関わりを持つことで、視野が広まり、視座も少しずつ高まっていったように感じたと入江さんは言います。

「家事や育児は直接的にお金にはならないのですが、以前に夫からこんなプレゼントがありました。ボーナスの日に、夫から封筒を渡されたんです。中を見るとお金が入っていて、『これは二人で稼いだお金だから、半分ずつ好きなことに使おう』と。嬉しかったですね」

そしてまた、幼稚園のお母さん同士の繋がりがから、入江さんに新たな道が開かれました。

私らしくいられる場所

「私はパソコンができなかったの



仕事に家事、育児、地域活動とパワフルに動き回る入江さん

ですが、配布用の手紙や資料を作成するために勉強しました。試行錯誤で毎回作っていたのですが、そうこうしている中で、ママ友のお母さんから『パソコンができるなら、会社の仕事を手伝ってください。』と声をかけていただきました。家事に支障がない時間帯に来てくれれば良いと」

入江さんは、夫に相談し、週3回、9時半から12時まで勤務することにしました。

「今は短い時間しか勤務できませんが、色々な経験をさせていたただいています。日々、勉強です。子供の成長と共に、勤務時間を長くできるかもしれないし、高学年に上がると、それもまた難しくなるのかもしれない。そのあたりは臨機応変にやっていけたらと思っています」

最後に、入江さんにとって仕事とは何ですか？と尋ねてみました。「母でもなく、妻でもなく、私でいられる場所です」

助産師の役割を

守っていききたい

公益社団法人日本助産師会

角田 佳志恵さん

地域に根差した 仕事がしたい

私は、終末期に携わる看護師になりたいと思い看護大学に入学し、在学中に看護師、助産師、保健師の資格を取得しました。病院実習時に立ち会ったお産で出会った方から思いもよらぬ感謝の手紙を頂き、助産師のやりがいを感じ、助産師を目指すようになりました。

大学卒業後、総合病院や助産院で助産師として勤めました。助産師は医師と同じように開業権を持つので、その後は開業助産師として、区の健診や産後訪問などを通して、たくさんの方に関わってきました。

私の母の名前は、産婆さんが名付け親だったこともあり、幼いころからその話を聞き、助産師を身近に感じていました。

学生の頃から、地域看護に興味があり、地域で仕事をしていきたいと考えていたので、生活の場

に出向くことが仕事のスタイルになっていきました。

ご縁で現在の日本助産師会へ入職しましたが、今までのキャリアが活かされるのかはわかりませんでした。しかし、助産師の見え方が変わるかもしれないと思い、環境を一新しました。

助産師の役割とは

助産師として地域で直接母子に関わることの面白さは、よりその人の価値観の深いところに触れられるというところだと思います。一期一会の出会いではありますが、助産師としてその場にいることを許されるということとは、人との出会いとしては、非常に特殊な体験です。ちよつとの会話から、その人の子どもへのまなざしを感じたり、ひとつの家族になっていく様子が見られたりすることは、とても興味深いです。

現在の仕事は、今までやっていたことを外から見ることができて、

改めて助産師の必要性を感じ、この職能をこの先にも残していきたいと強く感じています。

私は助産師を社会資源として考えていますが、助産師の役割はあまり知られていない現状があります。助産師は分娩や母子ケアだけでなく、思春期や、更年期を含む中高年期など、女性がその生涯で迎えるさまざまな心や身体に関することの専門家です。

助産師は、女性のライフスタイルに合わせて、健康を支援する仕事であり、その人の一生により添うものではないかと思っています。

助産師のこれから

私の現在の仕事のひとつは、「助産業務ガイドライン」の改訂に関わることです。

助産師は、法的に正常範囲しか扱うことができず、異常になってしまつと、医師の管理になります。特に妊娠から出産の時期は、正常と異常が紙一重なので、細かな判断が必要になります。その指針になるもの（ガイドライン）を、5年に一度見直しています。今年度はその年で、助産師だけでなく産科や小児科の医師も含め、検討を重ねています。

もうひとつは、助産師の実践能力や知識の習得を保証するための仕組みづくりに携わることです。助産に係る複数の団体の協議に



角田さんが働いている日本助産師会は鳥越神社近く。「とりこえサロン」では、子育てに役立つ講座や産後ケアなどを提供

どうする？ 家庭での性教育

何も知らない子供たちが、性犯罪の被害に巻き込まれる事件があとを絶ちません。家庭での性教育、どうしていますか？

今回は、大正小学校で開催された家庭教育学級を取材しました。



講師の「パンツの教室協会」代表 のじまなみさん
公式サイト <https://pant-su-kyoshitsu.com/>

我が子への性教育の 仕方がわからない

昨年の10月、台東区立大正小学校の家庭教育学級で「性教育」をテーマにした講座が開かれました。家庭教育学級とは、子供の幸せを願う保護者の思いを学習のテーマにPTAが主催してつくる学びの場所です。大正小学校の実行委員は、テーマを決めるにあたり、みんなが子供に関する悩みを出しあったのだそうです。その中で多く出たのが「家庭での性教育の仕方がわからない」という声でした。

現在、性教育は小学4年生から始まりますが、学校で教えられることは非常に限られています。だからこそ親は、家庭で子供に伝えていく必要性を強く感じているのでしょうか。しかし、どこからどこまでを、どのように教えたらいいいのかわからない。インターネットや本で調べても、曖昧としていてわからない。そこで、家庭教育学級に「パンツの教室協会」代表・のじまなみさんを招き、ズバリ、教えていただくことにしました。

性教育は学校では足りない 親が教えることが大切

のじまさんは、学校だけでは性教育

は足りない現状があると言います。

「性についての教え方がわからない家庭では、子供がもった性に関する疑問を『知らないでいい』と片付けてしまいがちです。何も知らないまま社会に放り出される子供たちは危険にさらされています。子供を被害者にも加害者にもさせないためにも、親が教育することが重要です。今の子供たちは、スマホやタブレットを日常的に使いこなしています。フィルタリングをしていないと、いとも簡単にアダルトサイトに行き着いてしまう世の中になっています。また、親世代よりも1、2年、身体の発達が早く、性に関する情報もあふれ返っているのに『正しい知識』の伝え方は昔も今も変わっていません」

性教育に大切な 一度きりルール

ではいいたい、どのようなタイミングで正しい知識を子供に伝えればいいのかでしょう。

「性教育には『一度きりルール』というものがあることを覚えておいてください。例えば子供から『赤ちゃんはどうやってできるの？』と聞かれ、ハッと驚いた反応を見ると、子供は親の反応を見て『聞いてはいけないこと』

なのだと思い、2度と質問をしなくなりします。子供はただ知りたくて聞いてきます。お子さんに算数や国語を教える時のように、子供が理解できる言葉で、科学を教えるように伝えてあげてください」

また、子供と性について話をするためには、日頃から子供が話をしやすい環境をつくっていくことが大切だとのじまさんは言います。

「子供の質問に対して、決して怒らない・ごまかさなない・逃げ出さないでください。どんな質問にも、まず『いい質問だね』と答えてください。そうすることで、話をしやすい環境になり、ひと呼吸置くことで、親も落ち着くことができます」

それではいいたい、いつ頃から性教育を始めたら良いのでしょうか。

「私は、性教育のゴールを、子供が思春期になった時に笑いながら性の話ができることと考えています。子供にセックスの話ができたらゴールです。セックスの話をして初めて命の話ができます。セックスの話をしないと、子供に伝えたい大切な話ができないのです。そこで、子供が2、3歳のおもらしなどでパンツを汚す時期から、お風呂で一緒にパンツを洗うことを習慣にしておくことで、そこを親子で『性』を語り合うタイミングにしてほしいと思います」

たいとうのキラッとさん紹介

さくらい ゆうこ
櫻井 悠子さん はなとう
「花藤」江戸手描提灯職人

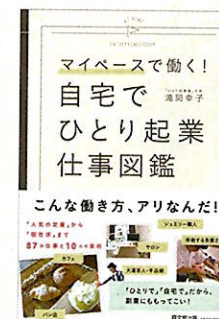
創業125年、祖父の代から提灯専門になった老舗の四代目。歌舞伎、寄席、相撲など江戸時代から続く伝統の文字を、自身の感覚を加えて提灯に描く。全国から注文があるお祭り用、飲食店や宿などの看板、結婚・出産・受賞など人生のさまざまなお祝いと、江戸手描提灯の需要は多岐にわたる。

依頼を受けてさまざまな言語を描くこともある。印刷にない手描きのよさは「自由自在に描けること。お客様の要望に沿って大切に作る一点もの」と悠子さん。業者仲間と月に1回の勉強会もあり、腕をみがく。伝統を土台に、若い人にもアピールできる現代的な提灯づくりにも挑戦している。



はばたき21 情報コーナーおすすめ図書案内

『マイペースで働く！
自宅でひとり起業 仕事図鑑』
滝岡 幸子著 同文館出版



ひとり起業とは、「たったひとりで起業し、ビジネスを継続していくこと」。そして「社長・事業主自身のスキルや知識を売る商売」。その基礎知識やさまざまな仕事を紹介します。

『お多福来い来い
てんてんの落語案内』
細川 貂々著 小学館



物事をなんでも悪い方に考えてしまう…。そんな生きづらさを感じていた「ネガティブ思考クween」の漫画家が、落語と出会い幸せと希望を見つけるコミック・エッセイ集。

『お母さん！学校では防犯もSEXも避妊も教えてくれませんか！』
のじま なみ著 辰巳出版



ピンチをチャンスに！それが「のじま流性教育」。子供の好奇心を逆手にとって愛と命の授業をはじめましょう。3～10歳までに親子でたのしく性教育。

はばたき21 メールマガジン 登録者募集中

男女平等に関する講座募集の案内や、新着図書案内などを電子メールでお届けします。
随時配信（月1回程度）

▼詳しくは区のホームページをご覧ください。
<http://www.anshin-bousai.net/taito>



編集・発行：台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」



男女平等推進プラザ「はばたき21」は、誰もが自分らしく生きる男女平等社会を実現するための区民の拠点施設です。個人・グループの活動や交流に利用できる活動交流コーナー、区立図書館の利用カードで男女平等に関する図書を貸出ししている情報コーナー、研修会・学習会・講演会等に利用できる企画室（予約制・有料）などがあります。ぜひご利用ください。

場 所 台東区西浅草3-25-16
(台東区生涯学習センター4階)
電 話 03-5246-5816
※日曜・休館日以外の9時～17時
開館時間 9時～22時
休 館 日 第1・第3・第5月曜日
(祝日にあたる場合はその翌平日)
年末年始(12月29日～1月3日)

情報誌編集委員 (五十音順)
梶原 雄・近藤 章子・鈴木 渚

ホームページ **はばたき21** 検索

